

## 16・7世紀ケンブリッジ州ウィリンガム教区 における農民騒擾と社会的経済的關係

高 橋 基 泰

### は じ め に

近代初期イングランドにおける人口移動に関する研究はごく近年になってなされるようになってきたもので、特に近距離移動の具体的過程についてはほとんど見逃されてきたといつてよい<sup>1)</sup>。それはその背景となる複合的な社会関係と地域経済のあり方を理解したうえで可能になるからである。本稿では、16・7世紀ケンブリッジ州ウィリンガム教区における人口移動の基礎となる地域経済と社会的関係との変遷を、当時進行しつつあった沼沢地の大灌漑計画を背景に生じた農民騒擾を通じて考察する。そこには、この地でおそらく中世以来教区を中心単位に形成されていた種々の関係が互いに密接に現れるのである。

---

1) この方面での古典は E. J. Buckatzsch, 'The Constancy of Local Populations and Migration in England before 1800', *Population Studies*, 5 (1951); do., 'Places of Origin of a Group of Immigrants into Sheffield, 1624-1799', *Economic History Review* (以下 *EcHR*. と略記), 2 (1949-50); R. S. Schofield, 'Age Specific Mobility in an Eighteenth Century English Parish', *Annales de Demographie Historique* (1970); P. Spufford, 'Population Movement in Seventeenth Century England', *Local Population Studies* (以下 *LPS*. と略記), 4 (1970), なおこれはさらに以下に発展した, do., 'Population Mobility in Pre-Industrial England' *Genealogists' Magazine*, 17 (1973-4); P. Clark, 'The Migrant in Kentish Towns', P. Clark and P. Slack, eds., *Crisis and Order in English Towns 1500-1700* (London, 1972); do., 'Migration in England during the Late Seventeenth and Early Eighteenth Centuries', *Past and Present*, 83 (1979), P. Clark and D. Souden, eds., *Migration and Society in Early Modern England*; D. Souden, 'Pre-industrial English Migration Fields', Cambridge Ph. D. thesis (1981).

## 背 景

沼沢地に接しているウィリンガムの粘土壌は肥沃であり中世以来穀作が盛んであるが、一方で共同地に産する様々の資源のため放牧・漁業も行われており、17世紀以降は特に酪農業に特産化していく。そして1524年から1660・70年までの時点をとれば、ウィリンガムも属するウーズ川河畔地帯における人口増加の激しさは顕著であり、特に移入が大きく移出を凌いでいた<sup>2)</sup>。

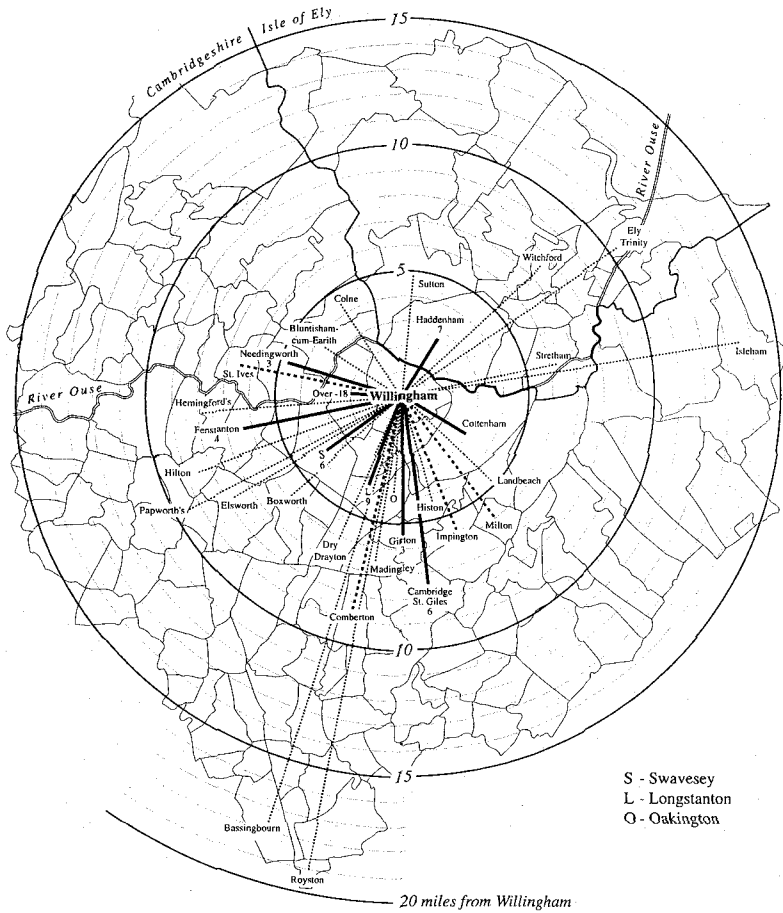
ではこうした移入民はいったいどこからやって来るのか。またこうした移入民をも含むその当時の社会圏とはどのくらいの範囲なのか<sup>3)</sup>。この点についてのおよその指標は、1518年から1720年代までの遺言書を通覧して言及される他の教区・地名により与えられよう(地図1)。この時期遺言書において言及された親族及び(土地)財産の分布が<sup>4)</sup>、ウィリンガムでは高地 'uplands' にその面射しを向けていることがわかる。ウーズ川により形成される障壁は北方への言及の過小さからも浮き彫りとなる。ケンブリッジ州に隣接するハンティンドン州セント・アイヴス St. Ives を中心とするネットワークを研究した M. カーターによると、やはりウーズ川を含む州境がネットワークの形成にかなり大きな障壁となっている<sup>4)</sup>。また、ウィリンガムの南方には、ケンブリッジ市の市街地が控えている。この町はわずか12マイルしか離れていないけれども、限界点を形成している。西方10マイルまでの範囲では、重粘土層地帯の教区への

2) M. Spufford, *Contrasting Communities* (Cambridge, 1974), p.18

3) この半径10から15マイル程度の社会圏についての議論は W. M. Williams, *A West County Village, Ashworthy, Family, Kinship and Land* (London 1963), pp.38-41, 53-83; M. Spufford, *Contrasting Communities*, pp.57, 151; K. Wrightson and D. Levine, *Poverty and Piety* (London, 1979), pp.74-9, 101; D. G. Hey, *An English Rural Community. Myddle Under the Tudors and Stuarts* (Leicester, 1974), p.190. またつい最近17世紀ノッティンガム州における数教区にまたがる親族関係の重要性を論じた A. ミットソンによれば、対象地域における家族復元では75パーセントのものが移動を経験しているという、A. Mitson, 'The Significance of Kinship Networks in the Seventeenth Century: South-West Nottinghamshire', in C. Phythian-Adams, ed., *Societies, Cultures and Kinship, 1580-1850* (Leicester, 1993), pp.53-5.

4) M. Carter, 'Town or Urban Society? St Ives in Huntingdonshire, 1630-1740', in C. Phythian-Adams, ed., *Societies, Cultures and Kinship, 1580-1850*, pp.84-92. 特に婚姻関係においても同様である, *ibid.*, pp.98-104.

地図1 ウィリングガムの遺言書に見られる他教区への言及：  
1510年～1730年



言及の頻度

- ..... 1件
- 2件
- 3件以上

0 miles 10

言及が密集している。この一帯は、本研究の対象とする時期の間、一般に人口増加の傾向にあった。ここで示される群塊は、入居者の起源に関して一つの手がかりとなろう。全ての移動がウィリンガムを中心に半径14マイル程度の範囲で行われていると思われる。例外と言えば、ケンブリッジを更に南に向かって次の市場町であるロイストン Royston、とそのまた外の軽土壌地帯にあるバッシングボーン Basingbourn への言及などである。また付け加えれば、ロンドンには常に言及が幾らか見られるのである。

### 1602年ウィリンガムにおける騒擾

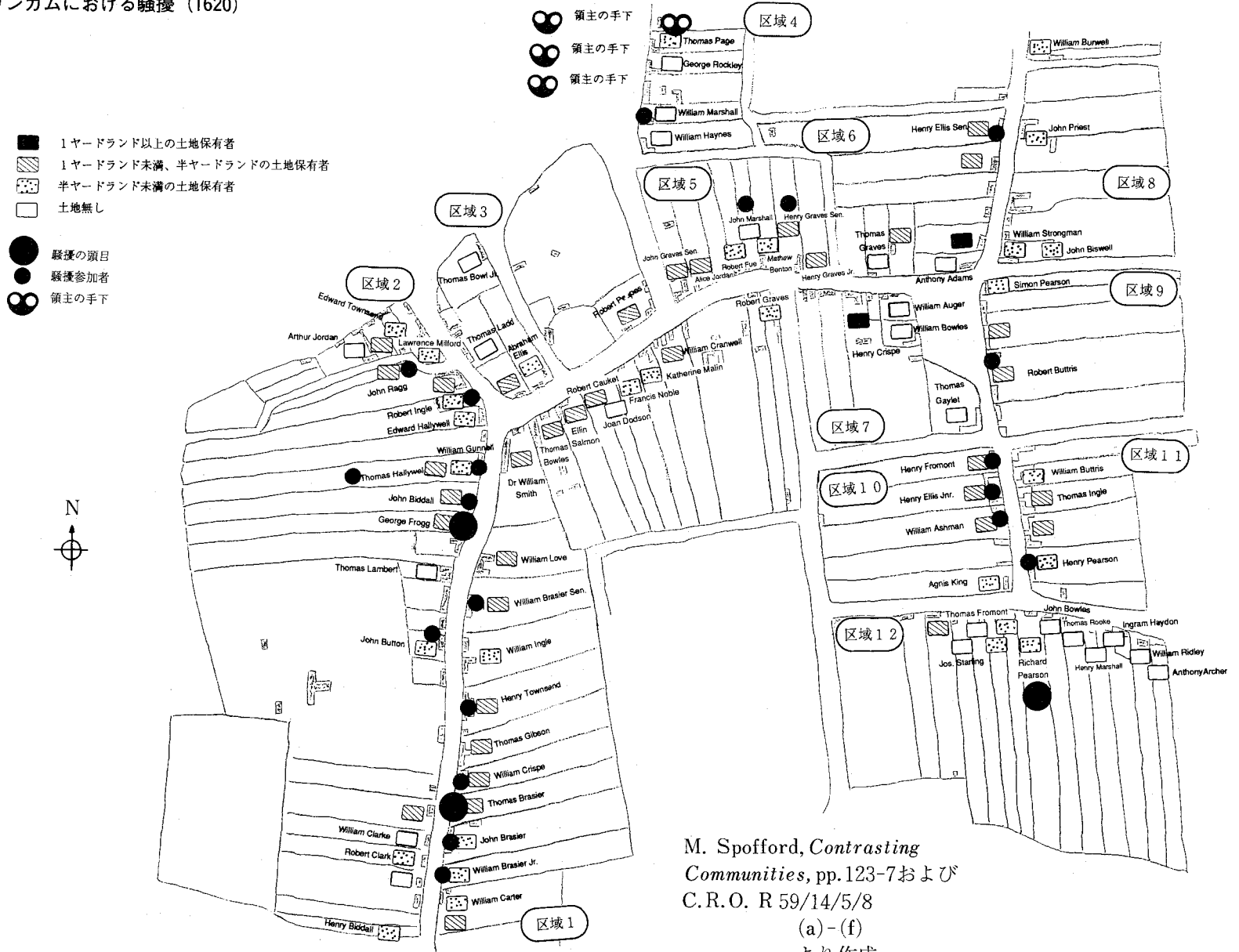
1602年に生じたウィリンガムにおける騒擾は、16世紀中葉の修道院解散後、元来イーリイ司教区領であったこの地を得た新領主が、共同地として重要であった牧草地を独占しようと囲い込んだ際に、主たる村民がそれへの反抗を示したものであり、村民の経済的・社会的基盤の堅固さを物語る事件であった。

地図2は『対照をなす諸共同体』に引用された「女王陛下への陳情」という文書をもとに、1603年の地図から得た保有地面積に関するデータと重ね合わせ作成された<sup>5)</sup>。この時期沼沢地の大灌漑計画が、有名なヴァーミュイデンやベツドフォード伯らを中心に進む一方で、各地で反乱が多発し情勢は次第に不穏となっていた<sup>6)</sup>。ウィリンガムの新たな領主となったサー・マイルズ・サンデイスは、国家規模での大灌漑計画に参加する、いわば進取の気性に富む人物であった。彼はウィリンガムにおいてもより高い収入を得る目的で、共同地として重要であった牧草地を独占しようと囲い込んだ。その行為は住民の生活を脅かすものであったため、彼らの反発を招くことになった。地図には、領主サー・マ

5) M. Spufford, *Contrasting Communities*, pp.123-7.

6) 沼沢地域の反乱について広い視点から議論したのは K. Lindley, *Fenland Riots and the English Revolution* (London, 1982). 特にウィリンガムを含む地域における灌漑に対する抗議については pp.38, 93. また, R. B. Manning, *Village Revolts* (Oxford, 1988), pp.174-5, 262. この事件の決着がどのようについたのかは詳しい経過は不明である。だが、その後サー・マイルズ・サンデイス自身は破産した, M. Spufford, *Contrasting Communities*, p.127.

地図2 ウィリングラムにおける騒擾 (1620)



M. Spofford, *Contrasting Communities*, pp.123-7および  
C.R.O. R 59/14/5/8

(a)-(f)  
より作成

イルズ・サンデイスへの反抗に参加した者の村落内での地理的分布とともに、反抗そのものの規模もあらわれるのである。「反抗者」は全部で36名をかぞえた。指導的役割を演じたのはこのうち3名である。地図では大きめの円に示された者がそれで、名を挙げれば、前神父であるリチャード・ピアソン<sup>7)</sup>に加えトマス・ハリウェルとジョージ・フロッグであった。他の参加者33名は小さめの円で示されている。最後に、領主側の村役人4名は一種のマーク（ ）で示してある。彼らは騒動を未然に収拾しようとしたが結果として失敗した。反抗の一端として参加者は、その牛の群れを、今や領主の手により独占されてしまった牧草地へと導き入れた。反抗者達はまた武器を手にして牧草地へ入りこみ、彼らの行動を阻止しようとした領主の代理人らに攻撃を加えたのである。3人の指導者格の者は、村落では別々の区域に居住地をもっている。しかしながら、騒擾への参加者達は区域1の南端と区域2・5・10に集中している。これらの区域は、比較的富裕な土地保有者により占められていた。対照的に南東端（区域12）と村落の中心地（区域1の北半分：区域3・7）からは1人として参加者を出していなかった。これら非反抗区域を占める者は、主として土地無し・手工業者であった。土地無しの者で参加したのはただ1名であった。しかしながら注意してみると、その土地無しの者とはマーシャル家の一員であった（区域4）。マーシャル家はウィリンガムでも比較的長くつづいている家系である。こうしたデータにより示唆されるのは、一般に土地保有者の財産が大となればなるほど、また家族の補助・支援が大であるほど反抗への参加が容易であったということである。

### 農業従事者と漁業従事者

この地は沼沢地に接しているとは言え、背景のところで触れたように人的・

7) Cottenham Village College Local History Group, *Charity School to Village College* (Loughborough, 1968), p.6.

経済的にはむしろ穀作地帯との結びつきが強かったものと考えられる。そうした状況がこの教区における経済の一種の二重構造を生んでいるが、この二重構造は騒擾への参加者の構成および首謀者の出自にも反映している。

参加者36名のうち25名が世帯主として同定されている。残る11名のうちでも8名は、ウィリンガムの主要家族名を抱えている。内訳は、ボウル家・ブレイヤー家・ピアソン家等である。領主の手下の1人を「不法にも殴打した」のはアレクサンダー・ボウルであった(彼は世帯主ではなかった)。更に、ピアソン家の参加は、リチャード・ピアソンの存在が大きく影響したと思われる。リチャード・ピアソンは指導者の1人ではあるが、その保有地は半ヤードランドに満たない。リチャード・ピアソンは、彼の区域(区域12)で彼1人のみが参加しているという点で特異であると言えよう。5名はウィリンガムの住人としては同定できなかった。領主の手下・代理人である4名のうち3名までやはりウィリンガムの住人ではなかった。もっとも、彼らの子孫はウィリンガムに定着していくのだが。残る1人はトマス・ペイジである。彼は水路のはじまる村落北端に住んでいた(区域4)。彼は「水夫」waterman だったようだが、所得が不十分なため領主に仕えることは大いにありえた。反抗の参加者にして唯一労働者であったウィリアム・マーシャルが同じ区域であった点も興味深い。

そのように狭い村落を二分した事件は、隣人関係のみならず親族関係にも少なからず影響を与えたと考えられる。むしろ同族集団の中でこそ対立が一層深刻であったようだ。1575年の土地調査記録では上述のトマス・ペイジと騒擾の指導者の1人リチャード・ピアソンとは隣り合うとはいえ、ペイジ家の遺言書とピアソン家の遺言書を一覽しただけではお互いに言及がないので何のつながりもないかに見える。ところが中間にトマス・キングなる人物を介在させると、領主側についたペイジ家と反抗の指導者を生んだピアソン家はつながりのあることが明らかとなる。トマス・キングは両家にとっての親族 kin なのであった。トマス・ペイジ別名ペニイの遺言書で、遺言者は一頭の雌馬を借金の弁済にあ

てるべく分与した相手が「兄弟の」キングであった<sup>8)</sup>。彼はニコラス・ピアソンの「義理の息子」であり<sup>9)</sup>、1581年4月22日に遺言書をのこしたマーガレット・ピアソンの息子であるとともに遺言執行者であった<sup>10)</sup>。こうした家族・親族関係の背後にはこの教区における経済的要因が深く影響を与えていると考えられるが、その点を以下検討する。

ウィリングラム教区はその北辺はウーズ川によって形成されており、河川流域では、中世以来独特の経済活動をも見いだせる<sup>11)</sup>。たとえばロンドン市民にして仕立匠であった John Develyn は1487年という早い時期に遺言書を作成した。その写しがカンタベリ大司教管区裁判所にのこされている。彼はウィリングラムの水域における白鳥（豚）swanns (swains) の群れからあがる収益を尼僧 nun である娘 Anne Mary Develyn にのこしている。遺言書には他にも息子もふくめて子供が複数いたが、結果としてほぼ平等に財産をのこしていると言えよう<sup>12)</sup>。そしてこうした相続における平等性は中世以来の慣行としてこの地域一帯に見いだせるもののなのである<sup>13)</sup>。

ウィリングラムでも幾つかの家系で、家族構成員の少なくとも1人が農業に従事し、また少なくとも1人が農業からより離れた職業に就いていた。例を挙げると、騒擾への参加者を出したボウル家の一統は漁業に従事し、もう一統は毛織物業に従事していた。1570年12月24日毛織物業者 weaver トマス・ボウルは遺言書を書きのこし彼の娘の3人に均等に雌牛・金銭・財貨を提共しているこ

8) Cambridge University Library (以下 C. U. L. と略記), Willingham Registered Will, Thomas Paydge als Penny, VC16:231.

9) Cambridge Record Office (以下 C. R. O. と略記), Willingham Original Will, Nicholas Pearson (1557).

10) C. U. L., Willingham Registered Will, Margaret Pearson, VC17:175.

11) Ouse 川の水流については、M. Carter, 'Town or Urban Society? St Ives in Huntingdonshire, 1630-1740', p.108.

12) C. R. O. (unofficial records) TR324/8.1487. ウィリングラムではドゥムズデイ・ブック時代には少なくとも鰻がとれるということにはなっていなかった。H. C. Darby, 'The Domesday Geography of Cambridgeshire', p.52. n.4.

13) J. Ravensdale, 'Population Changes and the Transfer Customary land on a Cambridgeshire Manor in the Fourteenth Century', in R. M. Smith, ed., *Land, Kinship and Life-cycle* (Cambridge, 1984).



とから、ボウル家の娘たちが財産の共同相続人になっていたことがわかる<sup>14)</sup>。もしも息子もしくは男系の相続人が死亡してしまうと、その場合娘たちが相続する。1577年、マーガレット・ボウルとアグネス・ボウルとは、死亡した兄弟の小宅地 *messuages* を均しく分け合った<sup>15)</sup>。更にこの場合、彼らの結婚の後もその所領の譲渡は引き続き認められていたから、実質上の寡婦産なのであった。それ故各々マーガレット・バタリィにアグネス・ピアソンと姓が変わっても引き続き同じ土地を保有していた<sup>16)</sup>。最終的にはアグネスの夫であるヘンリー・ピアソンが、元来ジョン・ボウルのものであったその小宅地を売却という形でロバート・バタリィおよびその妻マーガレットにより譲渡されて落ち着いたのである。このような分割相続は、当該家族が主として従事した職業に関連していると思われる。さらに同年同月、もう1人のトマス・ボウル、漁師 *fisherman* が遺言書を残している<sup>17)</sup>。遺言書の内容と家族復元票<sup>18)</sup>からこの二者は別人であるが、1570年12月15日、漁師トマス・ボウルは遺言書を残し「長男」ウィリアムに舟つき場 *boat gate* を残すかわら、娘と次三男のために金銭を平等に分け与えている<sup>19)</sup>。

キング家・ペイジ家・ピアソン家は皆親族であったことは先述したが、ペイジ家は既に M. スパフォードにより「パーディ家」*'Pardyes'* として紹介されている。彼らは水夫として印象に残る遺言書をのこしている<sup>20)</sup>。そこでは遺言者の兄弟、大ウィリアム・ペイジにも言及がみられる。ウィリアム・ペイジその人もおそらく水夫として遺言書をのこしている者と同一人物である<sup>21)</sup>。1575年から1603年の間の時期ペイジ家の保有地は21エーカーから14エーカーに減った。だが、彼らは漁師／水夫として1つの拠点を沼沢地に持っていた。思うに、

14) C. U. L., Willingham Registered Will, Thomas Bowl, weaver, VC16:82.

15) C. R. O., L1/118, C.R.19.Eliz.22.Oct.

16) C. R. O., L1/118, C.R.29.Eliz.15.Dec.

17) C. U. L., Willingham Registered Will, Thomas Bowle, fisherman, VC16:91.

18) Willingham Family Reconstitution Forms, M171.

19) C. U. L., Willingham Registered Will, Thomas Bowle, fisherman, VC16:91.

20) M. Spufford, *Contrasting Communities*, p.134.

21) *Ibid.*; C. U. L., Willingham Registered Will, William Paidge/Pirdue, VC16:331.

「ページ」が言及されるときは二統ある家系のうち、土地保有者の方が、そして「ベニイ」もしくは「パーデュー」の方は漁師あるいは水運関係に従事するのではなかったか。彼らは生活様式においても職業においても特化して分岐を深めていったと思われる。

更に、ページ家だけでなく先述のピアソン家も水運・漁業と水に関係する仕事に従事する系統を派生させていた。1558年のニコラス・ピアソンの遺言書で、彼は息子のウィリアムに舟つき場 boat gate (に関する権利) を、舟つき場に附属する全ての必需品とともに遺贈した<sup>22)</sup>。そして1582年、ウィリアム・ピアソンは、おそらく、父から譲られたのと同じ「舟つき場」を他の必要物件、マーシュ氏に保有する共同地である池を加えて息子らに遺贈している<sup>23)</sup>。トマス・ピアソンは、1575年「ジェントルマン」と記録されている<sup>24)</sup>。「舟つき場」の附属する物件・権利が増大していることを考慮すると、3世代を通じて、ピアソン家はジェントルマンを生み出すに十分な富を蓄積していたと思われる。

## 各 社 会 集 団

10ないし15マイル程度の範囲で生ずるごく近距離の移動は種々の契機から生じていたと考えられる。その中でも比較的明白なのが親族関係を通じての移動であるが、騷擾のあり方にも影響を与えつつ、親族集団は実際には以下の各社会集団と相互に錯綜して形成されていた<sup>25)</sup>。

22) C. R. O., Willingham Original Will, Nicholas Pearson, 1558.

23) M. Spufford, *Contrasting Communities*, pp.133-4, cf. C. U. L., Willingham Registered Will, William Pearson, VC17:244.

24) C. R. O., R59/14/5/8(b). 事件後の裁判記録では41名が記載されている。C. R. O. R59/14/5/9(a).

25) M. Carter, 'Town or Urban Society? St Ives in Huntingdonshire, 1630-1740', pp.112-2, Y. Lord., 'Communities of Common Interest: the Social Landscape of South-East Surrey, 1750-1850', in C. Pythian-Adams, ed., *Societies, Cultures and Kinship, 1580-1850*, pp.162-4, 167.

# 1) 親族集団

1575年および1603年の地図は、親族関係の集中・拡散の性質を特に良く呈示する。これらはウィリングムにおける土地調査記録(1575年)および1603年の地図をもとに教区登録簿・遺言書・裁判所記録など用いる史料すべてからの情報により作成した<sup>26)</sup>。区域2の南端の集中的発展は、区域5および6の衰えと対をなしている。外部からの移入民と相続形態・その性質からしてウィリングムでは、土地の一層の利用により今までに表にあらわれずにいたような親族関係までも露呈させる効果をも生んでいる(地図3および地図4)。先述の騒擾における参加者の結びつきを親族関係網を重ね合わせるとある偏向が見られる。その偏向は地理上にも社会階層上にもみられるけれども部分的に、この親族関係網の作用によるものであった。

その作用とは家族単位にはどのように現れるであろうか。まず平均して約250から300ヤード(メートル)を半径とする円の中に親族の全ての構成員が住んでいた。グレイヴ家は半径約50ヤードの円の中に固まり暮らしていたのである(区域5, 区域1北端)。また騒擾参加者を複数出したブレイザー家は、区域1の南端にその主たる構成員が住まい、徐々にではあるが着実にその勢力を拡大していった。ブレイザー家のこの静かな繁栄の一端を担うものとして、婦人層の連帯があり、それはウィリングム教区の境を越えていたこと小ウィリアム・ブレイザーの遺言書にも示されるであろう<sup>27)</sup>。遺言者小ウィリアム・ブレイザーは、2人の娘を遺言執行監督者にしつつウィリアム・ブレイザーを遺言執行者を選んだ他は義母・姉(妹)・伯叔母「伯叔父」('unkyl')の娘達つまり従姉妹及び姉妹の娘達つまり姪らにまで言及している。後に小ウィリアム・ブレイザーが1589年に半ヤードランドを残す際、彼は彼の妻に、彼の息子の家

26) C. R. O., R59/14/5/8(a)-(f), L1/118 Court Rolls (1547-1602), Parish Registers, Family Reconstitution Forms, C. U. L. Willingham Wills. なお、個々の親族関係の同定については、拙稿「16・7世紀ケンブリッジ州ウィリングム教区における親族構造と相続慣行」(東北大学博士論文 1995年)付録表を参照のこと。

27) C. R. O., Willingham Original Will, William Brasier Jnr. (1558).

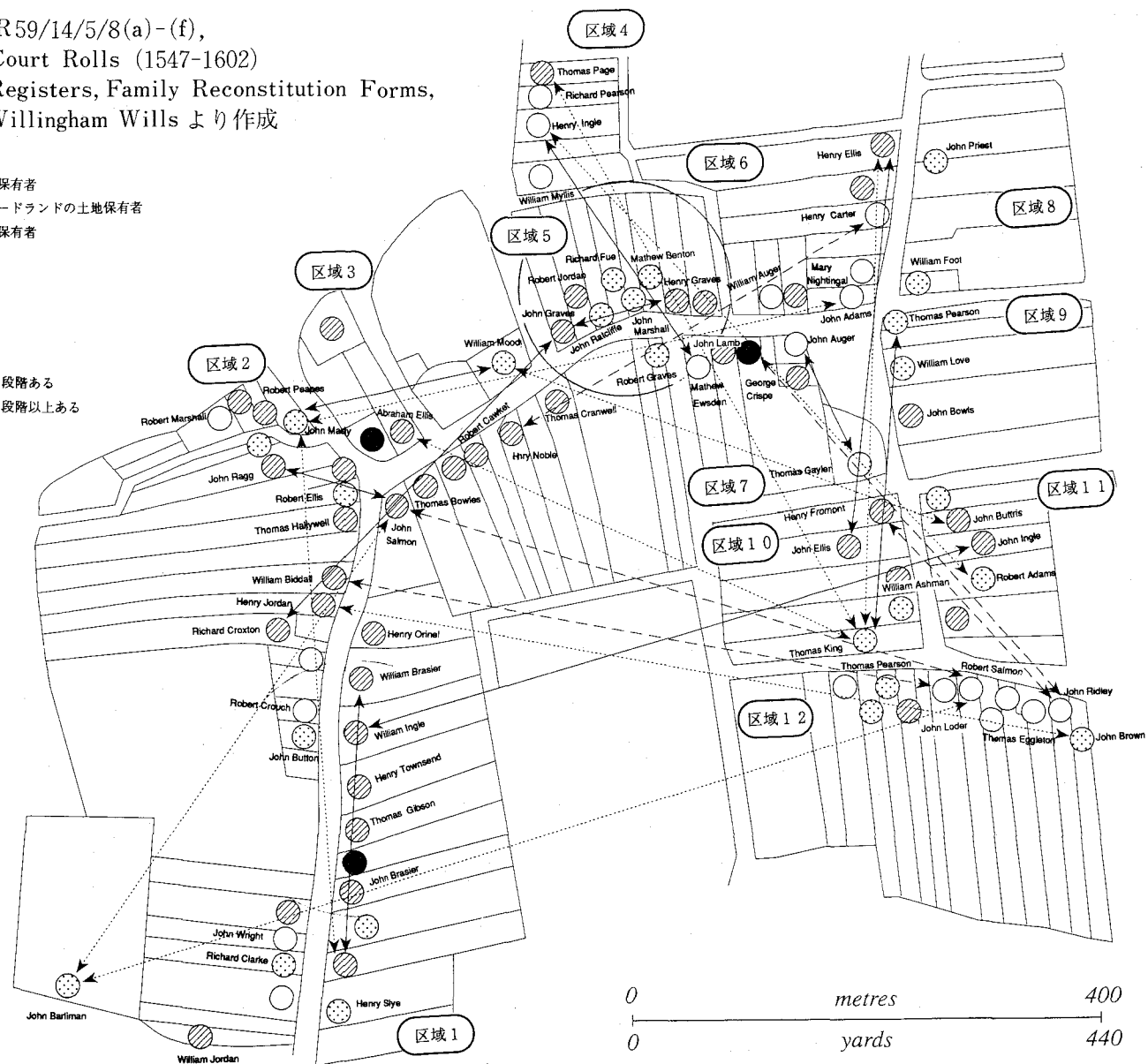
地図3 ウィリングラムにおける土地所有者の親族関係 (1575)

C.R.O., R59/14/5/8(a)-(f),  
L1/118 Court Rolls (1547-1602)  
Parish Registers, Family Reconstitution Forms,  
C.U.L. Willingham Wills より作成

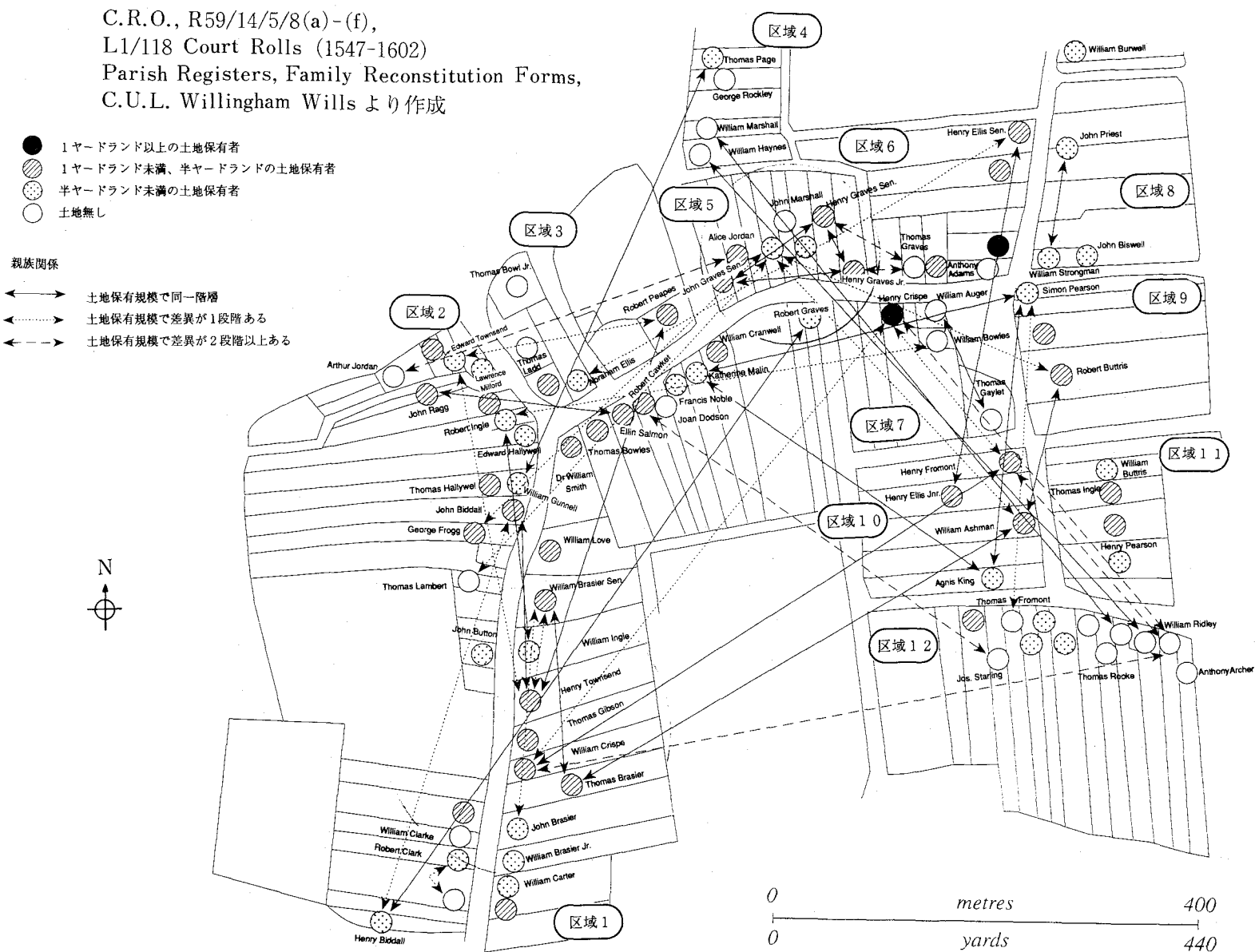
- 1 ヤードランド以上の土地保有者
- ◐ 1 ヤードランド未満、半ヤードランドの土地保有者
- ◑ 半ヤードランド未満の土地保有者
- 土地無し

親族関係

- ↔ 土地保有規模で同一階層
- ↔ 土地保有規模で差異が1段階ある
- ↔ 土地保有規模で差異が2段階以上ある



地図4 ウィリングガムにおける土地所有者の親族関係 (1603)



の中における居室 a house-room と年々の扶養金 annuity を与えた。ウィリアム・ブレイザーは遺言書に、彼の妻が息子の結婚まで、世帯の長たることを記したのであった<sup>28)</sup>。

## 2) 水運業者と宗教ギルド・「兄弟団」

教区単位で形成された宗教ギルド(講 guild)は、食宴・病気見舞・礼拝堂付き司祭 chaplain の保持・祈祷等を行うといった点からして家族の延長ともいえた<sup>29)</sup>。また、もしも子供を含む肉親が、年老いた遺言者の靈魂 soul のために祈りを捧げることを怠りそうであれば、このギルドの「兄弟姉妹」が祈ってくれると期待しえたのである<sup>30)</sup>。16世紀半ばまで民衆レベルにおけるカトリック信仰の堅固さを宗教ギルドの威勢に見いだす J. J. スカリスブリックの説を支持し、E. ダフィは、宗教改革直前までの時期イングランドの多くの教区ではこの宗教ギルドが形成されており、機構・構成員の重複を一般とし、両者は不可分でさえあった、と述べている<sup>31)</sup>。16世紀以前の時期、宗教ギルドや「兄弟団」のはたらきは、提供物の平等なる分配だけでなく職業集団なども含む教区の境界も超えた諸関係の形成の一端として機能したように思われる。ところが宗教改革以後この宗教ギルドが廃され、教区は教区民の連帯を祭礼・慈善事業などを通して補完する中間項を失うにいたった。M. マッキントッシュは貧民を対象とする慈善事業の性格内容が16世紀の中葉をもって転換をとげたと主張する<sup>32)</sup>。ウィリಂಗムでは少なくとも、この宗教上もしくは社交上のギルドの存在は報告されているし、それは遺言書にも遺贈対象としてあらわれている<sup>33)</sup>。

28) C. U. L. Willingham Registered Will, William Brasier, VC15:33. cf. M. Spufford, *Contrasting Communities*, p.164.

30) B. Hanawalt, *The Ties that Bound*, p.242.

31) J. J. Scarisbrick, *The Reformation and the English People* (Oxford, 1984), pp.19-39; E. Duffy, *The Stripping of the Altars* (Yale, 1992), p.142, 149-50.

32) M. McIntosh, 'Local Responses to the Poor in Late Medieval and Tudor England', *Continuity and Change*, 3(2) (1988), p.216.

33) E. ダフィは、中世リンカン州の沼沢地域において冬季母村から遮断される多くの人々がギルドの礼拝堂を唯一のよりどころとしていたのだが宗教改革によりそれを失ったと述べている、E. Duffy, *The Stripping of the Altars* p.455.

またウィリングムの遺言書にも散見しうるが、「親族と兄弟 Kindered and Bretheren」はE. ダフィによれば中世における親愛表現の中心的概念であった<sup>34)</sup>。1563年8月13日付の遺言書で、ジョン・ラムは息子のジョンに、舟つき場と呼ばれる漁業権をそこにおける利益と財貨に羊を20頭つけて渡している。同じ遺言書においてシモンド・ラムは「兄弟 brethren」と呼ばれている<sup>35)</sup>。「兄弟(団)」という言葉は、「水」に関連する職業に従事する家族に特(有)に用いられていたのか。もしもそうであれば「兄弟団」の効果は、単に提供の平等なる分割に見られるだけでなく、職業・教区など種々の枠を超えての関係の形成でもあった。F. ウッドが見出したところでは、水運業者の共同体は特に村境や州境によって制約されるものではなく、河川の水系によりその共同体は存在した制約されていったのである。水夫はそれ故浮遊性の高い共同体を教区境を超えて維持していたと言える<sup>36)</sup>。

上記の設定における難しさは、この時代の「職業」概念が曖昧であった、という事実由来しているように思われる。このことは特に、以下に述べるような不完全雇用の状態にある人々を想起すると明らかである。

### 3) 隠居・奉公制度・名づけ親子制度

隠居・奉公制度・名づけ親子制度は各々親族関係と関わりを持ち、その一方で近距離の人口移動にも影響をおよぼす。まず隠居についてであるが、興味深

34) E. Duffy, *The Stripping of the Altars*, p.235.

35) C. R. O., *Willingham Original Will*, John Lambe (1563).

36) 最近18・9世紀イースト・アングリアにおける水運に関する学位論文をまとめあげたF. ウッドによれば、18世紀ハンティンドン州・ベッドフォード州における地方の共同体の1つの普遍的な特徴だという。F. Wood, 'Transport in the Hinterland of King's Lynn 1760-1840', Cambridge Ph. D. thesis, 1992, Chapter 3. また、家族の系統の分岐と個々の生活様式の形成は様々なかたちで反映されうる。家族の構成員が小売業、各種加工業、都市の手工業、聖職者も含む専門職そして地主層と多様な広がりを出すことは常にではないが、頻々と見受けられた。A. Everitt, 'Dynasty and Community since the Seventeenth Century', in *Landscape and Community in England*, (London, 1985), p.311. その中には中世後期以来ヴィクトリア朝時代までそのような家族のネットワークを保ちつづけた事例も確認される、という、*ibid.*, p.313 cf. M. Prior, *Fisher Row: Fishermen, Barge-men, and Canal Boatmen in Oxford, 1500-1900* (Oxford, 1983) では河川沿いの社会における家族の関係網が描かれる。

いことに例えば父親など男性であってもインフルエンザ期にはその名前が言及されていないのであった。例を挙げれば、トマス・イングリイはその妻や子供・「胎児」のために遺言書を遺している。そこで遺言執行者に指名されたのは、「父親のイングル（イングリイ）」‘father Ingle/Ingley’であった<sup>37)</sup>。「隠居者」について我々が知ることは大変に少ない。M. スパフォードがオーウェルに見出した「厄介」sojourners 身分の者の例がその1つである<sup>38)</sup>。中世末期のダービー州を対象に行ったI. ブランチャードは、16世紀まで単に若者だけでなく老齢の隠居者もが奉公に従事することが観察しようとした<sup>39)</sup>。イングル家の事例では父親の名前が言及されていないということは、単に便宜のためということだけでなしに、彼が既に隠退していたということを示唆する。すなわち、いったんある人物が引退し第一線から退くと、彼もしくは彼女はもはや生産活動に携わっていないということで、特に記録者の観点からすれば重要とはみなされなかったであろう。

社会的水準に照らして、隠退した人物と奉公人とをくらべることはウィリングラムでは可能であろうか。そこに変化があったということは、ウィリングラムにおける、サーヴァント・奉公人の概念の曖昧さに反映される。中世農村における奉公人についてA. マクファーレンとB. ハナウォルトとは、奉公人を家内労働として解釈し、雇用労働とは見ていない<sup>40)</sup>。それ故、ウィリングラムのジョン・マディが彼のメイド、イズベル（姓は不明）と彼の乳母？‘nan’に1571年の遺言書で触れたとき、彼らが家内奉公人だったのか農業奉公人だったのかが判別

37) C. R. O., Willingham Original Will, Thomas I(Y)ngley (1556/1557).

38) M. Spufford, *Cambridge Communities*, p.105. 個々の事例ということであれば、1人の老いたヨーマンの引退のための処置への言及といったかたちで拾い上げることも出来る。W. G. Hoskins, *The Midland Peasant*, p.123.

39) I. Blanchard, 'Industrial Employment and the Rural Land Market 1380-1520', in R. M. Smith, ed., *Land, Kinship and Family-cycle*. A. ブラカンスは西欧における引退を概観し、引退を社会的経済的にみて「下降 stepping down」とするのが妥当であるとした。A. Plakans, 'Stepping Down in Former Times: A Comparative Assessment of 'Retirement' in Traditional Europe', D. I. Kerzer and K. W. Schaie, eds., *Age Structuring in Comparative Perspective* (New Jersey, 1989).

40) A. Macfarlane, *The Origins of English Individualism* (Oxford, 1978), pp.148-9. B. Hanawalt, *The Ties that Bind*, p.162.



しがたいのである<sup>41)</sup>。その時点でジョン・マディは胎内に子供を抱える妻がいた。更に、彼の姉(妹)「イズベル」は姓をつけずに言及されている。1575年、すなわちその遺言書作成の4年後にあたるが、もう1人のジョン・マディが2エーカーを保有している。それは、彼の息子であり相続者であるジョン・マディが小屋と1ルードの土地に1.5ルードの牧草地をつけて譲渡される7年前のことであった。その息子であり相続人である者が幼少であり、また父の寡婦、言い換えるなら息子の母親が妊娠中である間は、女性家内奉公人(姉妹も含まれる)がその小農場の経営・耕作に従事するということもありえたのではないだろうか。

遺言者が店を構えており奉公人の存在が確認されている場合、その奉公人は農事に従事していることはより可能性が高い。例えば1598年にロバート・ワードは遺言書で経営するの処分について述べた後、彼の名づけ子であり奉公人であるリチャード・ビダルに言及する一方で、以前にロバートに奉公したトマス・アダムについても遺言書で触れている<sup>42)</sup>。この点は、B. ハナウォルトもコメントを加えるように、村落社会のネットワークの構成員として主人と奉公人は、社会階層的には同じであった<sup>43)</sup>。それ故、奉公人は名づけ子と同様の贈与をうけていることが遺言書では明白である。とのことである<sup>44)</sup>。一方 A. クスマウルが指摘するように、その割合は不明だが子供を奉公にやるということは教育の一環として相当に裕福な家庭でも行われていたのであった<sup>45)</sup>。ビダル家にしろ、ワード家に子供を出すかわらで(1589年)1582年にはビダル家にも奉公人がいたことがわかる<sup>46)</sup>。

41) C. U. L., Willingham Registered Will, John Maddy, VC16:151; C. R. O., Willingham C. R. 24 Eliz. 23. Apr. cf. M. K. McIntosh, 'Servants and the Household Unit in an Elizabethan English Community', *Journal of Family History*, 9(1) (1984), p.19. なお, M. K. マッキントッシュによればエセックスのヘイヴァリングにおいては一世帯における奉公人の数はヨーマン層の世帯が1.1人, ハズバンドマン層が0.7人を記録している, *ibid.*, p.15.

42) C. U. L., Willingham Registered Will, Robert Ward, VC19:313.

43) B. Hanawalt, *The Ties that Bound*, p.157.

44) *Ibid.*, pp.314-7.

45) A. Kussmaul, *Servants in Husbandry in Early Modern England* (Cambridge, 1981), pp.77-8.

46) C. U. L., Willingham Registered Will, William Bedall, VC19:122.

イーリイ司教管区では1570・80年代以後職業の明示が遺言書においてより頻繁に見られるようになり、それに比例して種類も多様化・専門化していった<sup>47)</sup>。と同時に、奉公人の中でも区別がより厳密に定められていっているように思われる。「家内」「menial」「domestic」とただの奉公人との区別がまず先になされている。1602年、先述のピアソン家とペイジ家双方の親族であったトマス・キングの遺言書では、トマス・ラマスは羊飼ひ herdsman であるが、それ以前であれば、単に奉公人と記されているところである。彼がウィリಂಗムの共同体全体のために奉仕していたのか、トマス・キング個人のためだけであったのかは不明であるのだが<sup>48)</sup>。だが、その50年前であれば、そうした記述はより大雑把であった。例えば遺言書で「従兄弟」「cosin」の妻を「従姉妹」「cosyn」と言い表したジョン・ランペインは、彼の奉公人へも遺言書で言及する。その中には「時々奉公にあがった『sometimes servant』であったリチャード・コウ（ロウ）もいた<sup>49)</sup>」。

さらに名づけ親子制度との関連を考察する。同一の姓を抱く名づけ子に誰かが相当の分与産を与えている場合、それは彼らが親族として深い関係にあることを意味する。それは当時の名づけ親が新生児の祖父母・伯父ないし伯母であることが多かったからである。ジョン・ラヴの遺言書によれば（1556年8月26日）彼は遺言書作成の時点では直系の子孫を1人ももたなかったようである。それ故彼の名づけ子であり遺言執行者である同姓同名のジョン・ラヴが彼の家と土地とを相続することになっていた。名づけ子の方のジョン・ラヴは、実は

47) M. Takahashi, 'The Number of wills Proved in the Sixteenth and Seventeenth Centuries. Graphs, with Tables and Commentary', G. Martin and P. Spufford, eds. *The Records of the Nation* (Woodbridge, 1990), p.209.

48) C. U. L., Willingham Registered Will, Thomas King, VC21:109. つけ加えるなら、その2年後、1604年にこのトマス・ラマス自身が遺言書を書きのこすが、その職業は記していない。だが、彼はその妻に、未成年の娘たちに金銭を提供できるように、と「乳牛」を5頭遺している (Thomas Lammas, 1604, VC22:31, M11000)。もっとも、A. H. ハッセル＝スミスもノーフォーク北部のジェントルマンの賃金簿の分析を通じてあらためて確認しているように、shepherding は1人の成年男子にとっての責任ある仕事であったが、A. Hassell-Smith, 'Labourers in Late Sixteenth Century England: a case study, from north Norfolk (Part 1)', *Continuity and Change*, 4(1), 1989. p.20.

49) C. U. L., Willingham Registered Will, John Rampaign, VC9:152.

遺言者の孫か甥であった可能性が高い。また、名づけ子ジョン・ラヴの兄弟らも遺言書ジョン・ラヴの死にあたって相続にあずかることになっていた点からしても、名づけ子ジョンが遺言書ジョンのかなり近い親族であったと思われるのである。また同年の1556年ウィリアム・ヒルトンの遺言書で、遺言者は彼の名づけ子であるウィリアム・フロモンドの息子に、「灰色の雌馬を彼のもとに届けるように」とことわり書きをつけて提供している。彼らは親族か共同作業者であるかと推察される<sup>50)</sup>。

最後に名づけ親の選択と奉公人の選択とは人間関係において重複したようだ。A. マクファーレンとA. クスマウルとは奉公人の選択に関してはある特定のレベルがあった、という見解を打ち出している<sup>51)</sup>。中世末期イングランドにおける村落生活についての研究において、B. ハナウォルトは、名づけ親という家族外にも広がる紐帯は同一村内もしくは近隣地域における奉公人の選択と重なり合うということを指摘している。彼女によれば、15世紀後半および16世紀初頭に作成されたベドフォード州の遺言書のうち15パーセントで、遺言書の名づけ子についての言及がなされていたという。そして名づけ親に提供された財貨の価値は、孫へのそれと同様であった<sup>52)</sup>。そうした名づけ親制度と親族・奉公人制度との関係形成における重複は、裕福な人々や農業に従事しない人々(店主等)の遺言書において生じた。例えば既述の通り店を経営していたロバート・ワードの少なくとも6人はいる名づけ子のうち、1人はロバートの奉公人であった(1589年)<sup>53)</sup>。またこれも先に登場していたが、トマス・キングの主業は酪農であったが、彼は名づけ子の親族を奉公人とし遺言書では相当の施しをしているから、名づけ子は親族であった可能性が高い。

50) C. U. L., Willingham Registered Will, William Hilton,

51) A. Kussmaul, *Servants in Husbandry in Early Modern England*; A. Macfarlane, *The Family Life of Ralph Josseline* (Cambridge, 1970).

52) B. Hanawalt, *The Ties that Bound*, p.246.

53) C. U. L., Willingham Registered Will, Robert Ward, VC19:323.

## むすびにかえて

1602年に生じたウィリンガムにおける騒擾は、16世紀中葉の修道院解散後元来イーリイ司教区領であったこの地を得た新領主が、共同地として重要であった牧草地を独占しようと囲い込んだ際に、主たる村民がそれへ反抗を示したのものであり村民の経済的・社会的基盤の堅固さを物語る事件であった。この地は沼沢地に接しているとは言え、背景のところで触れたように人的・経済的にはむしろ穀作地帯との結びつきが強かったものと考えられる。そうした状況がこの教区における経済の一種の二重構造を生んでいるが、この二重構造は騒擾への参加者の構成および首謀者の出自にも反映している。土地無しの階層からは殆ど参加者が出ていない中で、例外は親族間の紐帯の強い家族の一員であった。10ないし15マイル程度の範囲で生ずるごく近距離の移動は、種々の契機から生じていたと考えられる。その中でも比較的明白なのが親族関係による移動であるが、親族集団の形成は実際には以下の各社会集団と相互に錯綜していた。以上のように、人口流動の大いさは、社会的基礎構造を変えながらも一定範囲で生じるものなのであった。

## 訂正のお願いとおわび

前号『愛媛経済論集』（第15巻第1号 1996年）に掲載いたしました拙稿「16・7世紀ケンブリッジ州ウィリンガム教区における農民騒擾と社会的経済的関係」で、不手際により、以下の校正ミスが生じました。以後十分に気をつけますのでご容赦下さい。

ページ	誤	正
171 (地図2 表題)	(1620)	(1602)
171 (地図2, 4, 5, 注記)	M. Spofford,	M. Spufford
173 6行目	一種のマーク (・)	一種のマーク (∞)
183 注29の欠落	J. B. Mullingher, 'The gilds of Cambridgeshire', <i>Proceedings of Cambridge Antiquarian Society</i> , 9 (1897); B. Hanawalt, <i>The Ties that Bound</i> , p. 235.	
189 12行目	以下の	上記の

(高橋 基泰)